おわりに

ランドマークとしての京都と京焼、そして学生の視点

木立雅朗

Ⅰ　京都と京焼の特徴－積み重ねる歴史－

京焼は各時期にいろいろなものを取り入れて展開してきた。それらは常に最先端のものであったが、「伝統的」な産業と言われるようになった今でも途絶えることなく受け継がれている。京都では新しいものの導入は古いものを捨てることにはつながらない。楽焼・高麗茶碗写し・色絵陶器・交趾焼写し・磁器・民芸陶器・オブジェ焼・化学陶器・ニューセラミックはそうした歴史の積み重ねである。化学陶器を除けば、現在でも京都で作り続けられている。

全国各地の窯業産地では特徴的な焼物が生産されているため、備前で「どれが備前焼ですか」とか、有田で「どれが有田焼ですか」などとという質問をしても観光客が迷うことはない。しかし、五条坂の陶芸店で「どれが京焼ですか？」と観光客に問うと、「いろんな種類の焼物があって、どれが京焼だかわからない」という答えが返ってくる。積み重ねられてきたすべてが京焼であることは、意外に知られていない。

江戸時代の京都と京焼

江戸時代の始まりによって京都は「首都」機能のうち政治的・軍事的機能、経済的機能を失う。しかし、江戸・大坂・京都という「三都」のひとつとして、武家政権の支配の正当性を保証・維持する歴史的・文化的首都として、首都機能の一部を残した。その役割を果たすために、京焼・西陣織をはじめとする京都の「伝統工芸」が王朝文化を「再現」して発展する。しかし、明治維新はその枠組みを大きく変えた。江戸が東京として生まれ変わり、公家のほとんどと天皇が移り住んだことによって、京都の首都機能は空洞化した。江戸時代の枠組みやパトロンを失ったのは、全国のほとんどの「伝統工芸」でも同様であった。京都も同じように変わらざるを得なかったが、京都は各地の伝統工芸と違う側面をもっていた。神社仏閣、茶などの宗教的・文化的中心が京都に複数残された上に、新しい政権も徳川政権と同じく「天皇を中心とした国家体制」の中で支配の正当性を維持しようとしたのである。そのために京都が「日本人のアイデンティティー」を確認する上で精神的な支柱であり続けられたこと、各地の伝統工芸に比べてはるかに大きい規模を維持しそれらが複合産業として地域と一体化していたこと、すでに厳しい競争社会の洗礼を歴史的に受け続けてきたこと、など、多くの理由によって維持されやすい条件をもっていた。江戸時代の遺産がほかの地域より大きかったともいえよう。

他の観光地に比べると、京都は変わらない一定の魅力を維持してきた。近年は特にその傾向が強いように感じるが、その京都人気は右傾化する社会現象と対になっている可能性もある。再び、近代的な「日本人のアイデンティティー」に関心が高まっているように感じる。京都に関心をもつ場合、そうしたアイデンティティーを確認することと混同される場合もあろう。しかし、同時にそのアイデンティティーを再検討しようとする知的好奇心

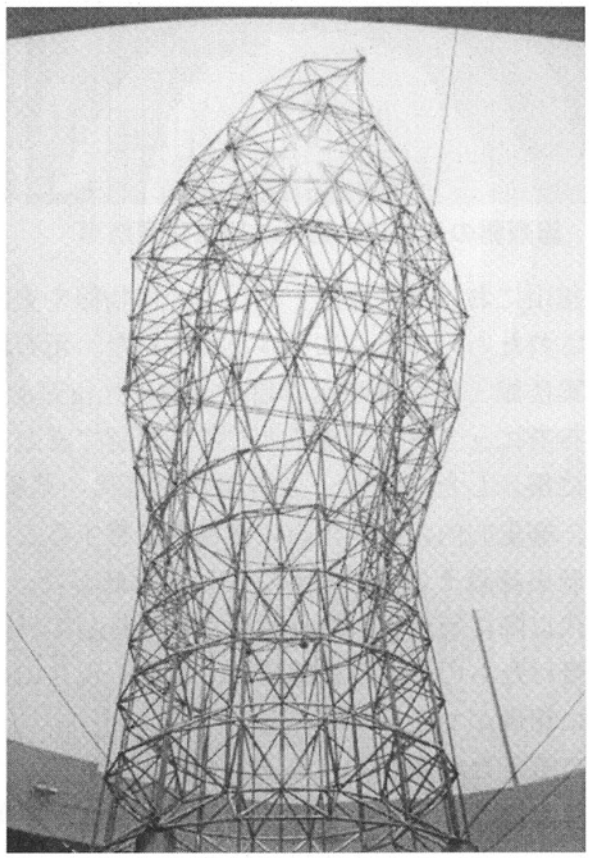
が強いこと、足元の歴史を再検討しようとする歴史的好奇心が強いことも、また確かなことであろう。

Ⅱ　考古学と象徴

2005 年に約 4 カ月間、大韓民国の国立釜山大学校に留学する機会に恵まれた。さまざまな理由で十分な準備ができず、ハングルを読めない・話せないままに留学してしまったが、そのお蔭で全く異なる経験ができた。解説板の説明文すら十分に読めなくても、遺跡や博物館の展示自体は十分に考古学的に理解できるものであった。確かに詳細な部分についての検討はおろそかになっただろう。しかし、それは「言語」としての分野にとどまり、「言葉にならない」部分、「言葉にできない」部分、つまりは考古学的にもっとも大切な部分については、「私の目と感性」の力量次第であった。繰り返し現地を訪れることで、「言葉にならない」経験を深めることができたと感謝している。

国連軍墓地

大庁公園

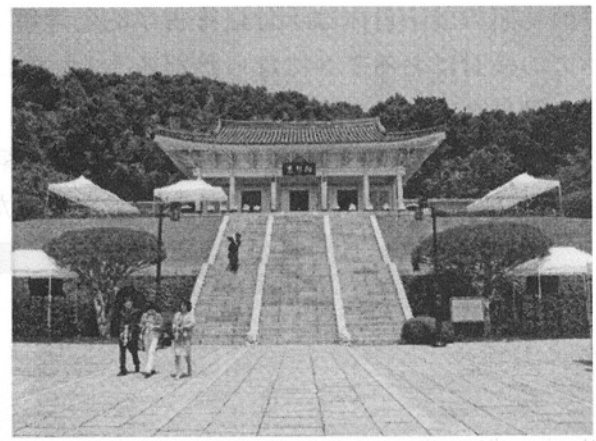


民主抗争記念館のシンボル　**民主の松明**

そこで改めて痛感したことは、考古学にとって、あるいは「モノ」の研究にとって、「象徴」研究が極めて重要だということである。釜山の遺跡や博物館は特定の「モニュメント」であり、「ランドマーク」であった。国連軍墓地や大庁公園・40 階段文化館のように韓国戦争（朝鮮戦争）の象徴は、おそらく多くの日本人にとって想像以上のものであろう。私自身、この出来事の意味の大きさをこれらのモニュメントによって初めて知らされた。民主抗争記念館も同様である。また、釜山近代歴史館はかつて「東洋拓殖株式会社釜山支社」として日帝による植民地政策の拠点であり象徴であったが、日ソ冷戦時代には「釜山米文

化院」として利用され、米軍支配の象徴と見なされてきた。常に外来勢力の支配・侵略の象徴であったとも言われている。それを「近代歴史館」とすることに強い象徴的意味がある。2004 年 5 月 25 日、壬申倭乱（文禄の役）の忠臣を祭った「忠烈祠」で「第 413 回忠烈祠祭享」が行われていたが、その施設の広く立派なことと「413 回」という数字も、自分の無知を教えてくれた。それ以外にも近年の韓国経済の発展を物語る数々のモニュメントが建造され続けていた。書物やマスコミの情報から得られる韓国のイメージ、あるいは自分自身の無知を覆すものであり、「モノ」を見ることの重要性を改めて認識させられた。

忠烈祠の入り口・第 413 回忠烈祠祭享



釜山市忠烈祠の中心施設

釜山における「象徴」としての博物館や史跡の姿は、韓国における歴史認識が素直に表現されたもののように受け止められた。新石器時代～三国時代の倭との交渉・壬申倭乱・草梁倭館・植民地時代の独立運動・光復記念・韓国戦争（朝鮮戦争）・民主化抗争を記念するモニュメントが至るところに確認できた。釜山市立博物館の展示では、壬申倭乱を詳細に展示したコーナーと善隣外交時代の草梁倭館の詳細な展示が隣り合わせになっており、歴史的内容の落差の大きさを実感することができた。この落差の大きさは、釜山市民の歴史認識そのものを示していると感じた。博物館・資料館・記念碑などの多くは 1990 年代以降に新設されたり改修されたりしていたが、それは韓国経済の発展と民主化の流れを受けたもののように感じる。また、現在の日韓関係も大きな要因となっていることは容易に想像がつく。

こうした経験から「モノ」(遺跡を含む)の象徴性は、「言葉」に頼りすぎるならば見えにくくなる部分もあることを理解できた。言葉は自分の都合のよいように表現され、自分の都合のよいように理解される。あるいは言葉は自分の認識の枠をでることがない。

考えてみれば、古墳も寺院もすべてランドマークである。須恵器や緑釉陶器、京焼も象徴的な遺物である。人間が作る「モノ」で象徴性が全くなく、100 ％実用品というものは存在するだろうか。他地域のものと比較するならば、すべての「モノ」に何らかの象徴性があると感じる。少し長めの海外旅行であれば、そのことが理解されやすいと思う。

なお、文献史学で必須とされる史料批判は自分の認識との格闘でもあろうが、「モノ」を見る場合にも格闘が必要である。「モノ」は嘘をつかないかもしれないが、人間は自分の認識き枠内で解釈し、誤解するものである。

象徴的な「モノ」

たとえば、江戸時代以来、岩倉木野の地で行われてきたカワラケは古代末以来のカワラ

ケを使用し即座に廃棄する儀礼にとって必要な消費財であった。考古資料としては年代を決める基準ともなる上に、その存在や儀礼のあり方が社会を象徴するものとしても重要である。それらを使う行為は江戸時代には一部の地域を除いて急速に廃れるが、京都や江戸の一部の遺跡では多量に廃棄されていることが確認できる。江戸では将軍の御成りの際の饗宴で必要不可欠なハレの儀式用アイテムとして使用されているし、京都では公家町から大量に出土し、武家社会とは全く異なり、日々の日常的儀礼の場で使用され続けたことが確認された。公家が公家であるための必要な儀式に不可欠なアイテムの一つとしてカワラケが存在した。江戸時代における公家町のカワラケ出土量は全国的にみて極めて特異であるが、そのことが逆に公家社会を象徴している。また、そのカワラケは極めて薄く、大量生産されたものである。木野の民俗例では粘土塊を肘で薄く延ばす方法で口径の小さいカワラケが製作されていたが、古代以来、粘土紐巻き上げで作られてきた伝統が、江戸時代のある時期からこのような製作技法も取り入れるようになったようだ。さらに大型のものは棒で粘土円盤を延ばす方法もとられる場合があったようだ。古代末以来の「伝統的儀式」がこのように変化した理由は、生産の発展として理解できる反面、儀式に使用するアイテムの「儀器化」が本格的に進行したことも示している。これらカワラケについては、近現代の民俗調査を踏まえた田中一廣氏の一連の研究によってより詳細に検討することができるようになった（田中 1994 など）。近現代の民俗考古学にとって重要な視点の一つに、「モノ」がもつ象徴性を研究しやすいという点があげられる。

そのように考えると、考古学は民俗考古学の利点を生かして近現代社会における「モノ」の象徴性を研究し、近世以前の「モノ」の象徴性と比較検討する必要があるのではないかと思えてくる。現状では、「モノ」の象徴的意味を問うことなく、ある意味で恣意的な解釈に頼っている部分が大きい。そのことによって「モノ」の認識を偏らせている場合もあるように思う。

韓国における「象徴」としての博物館や史跡の姿は、韓国における歴史認識がモニュメントに変換されて示されたものだと理解される。そのことを韓国の人々は日常的に感じることは少ないだろうが、日本人とて日本の姿に象徴を見出し自覚することは少ないだろう。考古学で象徴をどうあつかうのかが重要だと改めて感じた。そして、帰国してもっとも強く感じたのは、京都は「象徴の塊」だということだ。以前から象徴的な土地柄であることを意識することはあったが（木立編 2005）、さらに強くそのことを感じざるを得なかった。「日本の象徴」を散りばめた歴史都市として、さらに強く意識するようになった。ある意味で、京都は日本人のアイデンティティーを養いそれを確認するための装置として存在する。現代社会のなかで「日本とは何か？」という問いが深まれば深まるほど、京都の価値は高まるのではないだろうか。また、確かに京都には歴史的に積み重ねられてきた数々の小道具や大道具がそろっている。それらすべてが象徴であり、さらにその総合としての「舞台としての京都」も象徴である。ただし、「どれが」と特定することはできない、どこか曖昧な象徴でもある。意識的には平安時代の昔、王朝文化に対する想いが強いがそれらの多くが江戸時代に新たに作り出された「王朝文化の復興」であった。そのようなものの大半は平安時代には存在しない。ある意味で当時の政策のために、創造・捏造された象徴であった。その創造・捏造もすでに伝統と呼べる時代になったが、現在の社会もそうした作業を繰り返して「需要」に応えている。この需要こそが問題である。

Ⅲ　ランドマークとしての京都・京焼

平安京造営以来、京都は「日本国」のランドマークであった。政治経済的な首都というだけでなく、象徴的な都市としての役割を担ってきた。その象徴性が強い段階にはさまざまな手工業が政治的に展開されたが、陶磁器生産は瓦や緑釉陶器以外は基本的に他の地域に担われていた。中国からの輸入品はもっとも高級な品として珍重されたが、それを模倣する緑釉陶器の窯は平安時代の後期には他地域に移る。それ以後、鎌倉時代・室町時代を通じて京都で高級な陶磁器が生産されることはなかった。各地からの貢納品や交易品でまかなっていた。それが、安土桃山時代になると楽焼がはじまり、江戸時代にはいると粟田を初めとする陶器生産がはじまるのである。これらは付加価値の高い高級品であった。高級な陶器を焼成することは平安時代以来のことであり、王朝文化の復興を目指す新旧の勢力（武家と公家の勢力）の利害が一致した上での出来事であったと想定している。京都で高級陶磁器が生産される理由のひとつは、京都が唯一の首都ではなくなったためである。唯一の首都であった段階には生産より流通に力点がおかれたように思う。陶磁器は京都の象徴性を助けるアイテムの一つにすぎない。多くのアイテムが京都の象徴性を高め、その流れは現在でも続いている。しかし、明治維新後の京都の変化は大きい。江戸が東京となり、名実ともに唯一の首都となってしまい、京都の象徴性は過去形の憧れとなった。清水焼という名称が普及するのは、京都の象徴性が過去形になってゆくなかで、御所がもつ役割が相対的に低下したためではないだろうか。政権にお墨付きを与える天皇や公家たちはすでにいない。ただし、それ以外のさまざまな家元や寺社仏閣は残り、現在でも集約力を保っている。これらがなければ京都の中心性は著しく失われてしまっただろう。

「時代を通じて変わらないものを求める」心が京都を支えてきたように思える。それは江戸時代から始まったと言ってもよいのではないか。ただし、鎌倉時代にも室町時代にもその流れはあったかも知れない。それが制度化されたかのように本格化するのが江戸時代である。本来、「時代を通じて変わらないもの」など存在しない。そのようなあり得ないものを求める心に応えたのが、京焼であり、西陣織であった。京都の伝統工芸はそうした思想的流れのなかで生み出された、もしくは展開したものである。「時代を通じて変わらない」ことを売り文句にしながら「時代の最先端」であることも求められた。矛盾する要望にどのように応えたきたのだろうか。それが京都の重要な研究視点ではないか。

京都研究の欠落

京都を研究すること、京焼を研究することは、とりもなおさず、日本の象徴を研究することに繋がる。そのことがマイナス面に働く場合、地域史不在のまま、「京都を研究する自分自身」に対する自愛に溺れることになる。そのため、「地方の研究」を「地域ナショナリズム」や「お国自慢」と批判しながらも、京都においても同じことを行っていることに対しては意識されない場合が多い。「郷土史」の場合、「郷土自慢」を批判されることはあっても、京都研究の場合、「京都自慢」は批判の対象にはなりにくい。日本各地にあることやものが、なぜかしら「京都の特色」として説明されることも多い。しかも、内側だけでなく、外側からもそれに対する批判は聞こえにくい。京都のイメージは、そのことを当たり前のこととして疑問をさしはさまない、甘く曖昧な認識に支えられている。そこ

にこそ、京都の不幸がある。これも行き過ぎた地域ナショナリズムの一つに加えるべきである。京都独特であるとするならば、「京都ナショナリズム」と呼んでもよいかも知れないが、そこには実態としての、あるいは「身の回りの歴史」としての地域の姿は現れにくい。江戸時代以来の考証史学の伝統を保った京都研究者の中にはそうした点を戒める雰囲気があったはずだが、そうした良き伝統の部分が十分に伝えられているとは思えない。

このような現状のなかで、地域史研究としての熱くて冷静な京都研究がもっとも必要とされていると考える。身の回りの歴史を身の回りのものとして正しく認識し、相対視する視点を持ちうるかどうか、「日本の歴史」と混同し癒着した認識、つまりは「中央中心史観」や「お国自慢」に陥ることなく自分自身の足下を見つめることができるのか。そうしたことが、京都に住むもの、関わるものとして避けられない課題であろう。

Ⅳ　学生の視点

「学生の街、京都」と言われるが、ほとんどの学生たちは京都の表面を素通りしてゆく。たとえ歴史を専攻する学生であったとしても、それは同じである。京都にとって学生たちは経済効果をもたらす「ひとときのよそさん」にすぎないのだろうか。

学生たちが実際に京都の街に入って見たこと・聞いたことをまとめた本書には、彼らが初めからもっている「京都」イメージを増幅している部分もあれば、逆にそれに左右されずに実態にせまり、素直に驚き楽しんでいる部分もある。常識を身につけた社会人学生と「常識」を身につけようとしている若い学生たちの調査は、指導教員の能力や偏向を乗り越えて、京都の実態に迫ったものである。もちろん、京都の一側面にすぎず不十分な点は多々あるとはいえ、今しかできない調査を行った価値は大きい。その意味で本書の副題は「京焼を通じて学生が見た 2005 年の京都」としてもよいだろう。調査の過程で多くの方々のお世話になり、知的好奇心と感性を育んだ学生たちは、やや偏っているが「京都通」の仲間入りしたと言ってよい。大半が京都を去ってゆくが、彼らにとっての「京都の意味」は大きい。

本書は京都を堪能した学生の「おもしろかった」という感想であるとともに、今の彼らにとっては渾身のお礼でもある。

学生ともども、調査にご協力いただいた多くの方々に深く感謝申し上げたい。

［参考引用文献］

田中一廣 1994「京都・岩倉木野の土師器竈－近世土師器焼成窯の紹介－」『滋賀考古』第 12 号、滋賀考古学研究会